

書 評

嚴志雄著

『牧齋初論集——詩文、生命、身後名』

大 平 桂 一

大阪府立大學

『牧齋初論集』は香港中文大學教授嚴志雄氏の著書で、オックスフォード大學出版局（中國）から本年出版された。評者は5月に開かれた第63回國際東方學者會議 Symposium III: 明末清初研究の新動向—思想・文學・藝術 (New Trends in Research on the Late Ming and Early Ching Period. II: Thought, Literature and Art) における嚴志雄氏の發表に際し、最初に質問をした縁で嚴志雄氏から『牧齋初論集』を惠與され、歸京後全文を通讀し、大きな感銘を受けた。『牧齋初論集』は明清文學研究の「新動向」(New

Trends) を代表する著作であり、この書物を日本に紹介することは大きな意義を有すると確信するに至り、筆を取ることを決意した。なお評者は錢謙益研究の専門家でなく、當該書の理解において甚だ缺ける點があることは免れないが、陳涉・吳廣の役をつとめるということなどでなにとぞ諒とされたい。

以下に目次を挙げる。

導論

- (1)① 錢謙益攻排竟陵、鍾・譚新議
- (2) 情欲的詩學——錢謙益、柳如是『東山酬和集』窺探
- (3) 哭泣的書——從錢謙益絳雲樓到錢曾述古堂
- (4) 清初錢謙益、王士禛「代興」說再議
- (5) 錢謙益遺著於清代的出版及「典律化」歷程
- (6) 權力意志・清高宗乾隆帝譏斥錢謙益詩文再議
- (7) 近代上海『申報』中錢謙益的身影
- (8) 春秋有變例、定哀多微辭——試論錢謙益之論次麗末東國史及詩

(9) 典午陽秋、休聽暇豫——朝鮮文士南九萬所述錢謙益詩
考論

先ず嚴氏は導論においてこの書物全體の理論的枠組みを
なすフーコー (Michel Foucault) とブルデュー (Pierre
Bourdieu) の理論を紹介する。本書の全體を見渡す時、
フーコーよりはブルデューの理論的影響の方がより強いと
感じられる。導論では特に後者の社會空間、階級、位置、
權力、關係などの概念が説明され、それらを手がかりに錢
謙益の文學を、彼が屬した明末清初の「社會關係學」(家
族、姻戚、郷里、師弟、座主門生、同年、地域、黨社、身份、階
級) から読み解いていこうとするマニフェストとなってい
る。

以下論文ごとに内容を紹介していこう。

(1) 錢謙益攻排竟陵、鍾・譚新議

この論文では、嚴氏は錢謙益の竟陵派攻撃の内實を探る
ためにブルデューの「文學界」(Champ littéraire) の理論

を紹介し、この理論が明末に流行した竟陵派と、その後
登場した錢謙益の興亡を説明する際に極めて有効であると
述べる。まず取り上げられるのは『列朝詩集』の鍾惺小傳
の構成である。小傳の前段は鍾惺の籍貫、進士及第の時間、
官歴の後に、その詩學が述べられる。このような書き方は、
「鍾惺は權力の場での位階を固めた後に彼の異端的な詩學
を営み始めた」(同書九頁) という印象を興えようとしてい
ると嚴氏は述べ、さらに鍾惺小傳の「天下王無く、桓文作
らず、宋襄徐偃は德涼く力薄く、起ちて會盟の柄を執るも、
天下取えて以て覇に非ずと爲す莫きなり。」を引いて、「錢
氏は一步進んで鍾・譚勃興の機縁と性質を論じ、鍾・譚が
晩明の文壇に勃興したことを春秋時代の霸王の興亡に譬え
ている。彼は「天下王無く、桓文作らず」と書くことによ
って、鍾・譚が「德涼く力薄し」であって、天下の文壇を
リードする力量がなく、宋襄徐偃が僭越にも霸王の事業を
行った如く、時勢に乗って成功しただけだと暗示してい
る」(二〇頁) と述べる。また『詩歸』の成功にふれて、こ
の古代から唐代までのアンソロジーにおいては、二人によ

るテキストに對する恣意的な改訂が行われ、各作品への評語が付されており、鍾・譚がこのアンソロジーを通じて同時代の詩學を方向づけようとした意識的な戦略が見て取れると述べた上で、こう結論付ける。「テキストの製作者は優越的な地位を賦與され——もちろんこのような地位は行動者が主體的に得たものである——自由自在に藝術上の價值觀や正典性を構築する象徴權力を行使できるのである。」(同書二三頁)

錢謙益は鍾・譚が握っていた文學界における象徴權力の行使者としての地位を奪うために、『列朝詩集』では彼らの初期の詩作のみを收め、世間がもてはやしていた鍾・譚の作品を葬り去ろうとしたのである。そのために、鍾・譚の詩作が下劣なものだと罵る以外に、政治や社會の衰退の豫兆となった妖氣や邪氣を帯びた「詩妖」という非難を浴びせる必要があった。つまり、ブルデューのいう「文學界」のみならず、「政治界」にもまたがる攻撃の手法を駆使して錢謙益は鍾・譚を追い落とし明末清初の文壇の領袖の地位に昇りつめたのである。

嚴氏によれば、譚元春に對する錢謙益の攻撃は、鍾惺に對するものとはやや異なり、譚元春の詩才の薄さ、學問のなさに重點が置かれ、さらに竟陵派の詩作の缺點を暴こうとする。嚴氏は譚元春の小傳の後ろに付されている執拗な批判には、鍾惺に對する批判も含まれると推論し、次のように述べる。「詩評の一段で、錢氏は譚元春の詩に對する評語を羅列する…貧—寒、薄—瘦、僻—幽、凡—近、味—深、斷—掉、亂—變。寒、瘦、幽、近、深、掉、變は評價されるべき詩歌の風格であり、同時代人が譚氏の詩の美點として挙げた特徴である。しかし、錢氏によれば譚氏はこれらの評語にはふさわしくなく、せいぜい貧、薄、僻、凡、味、斷、亂であるのに過ぎない。」(同書二〇頁)「竟陵派を壞滅させ、鍾・譚の影響力を拂拭するためには、詩法から攻撃するだけでは、全面的な効果が見込めないと錢氏は考えたのであろう。錢氏は再び文學批評を政治と道德の領域の高みにまで引き上げ、正統と異端を見晴らせる場所に立ち、高飛車な姿勢で竟陵派を攻撃している。「何ぞ其れ淫哇卑賤なるや」、「何ぞ其れ俚なるや」、「經義を用いること

何ぞ其れ謬あやまるや」、「何ぞ其れ鄙そむにして倍そむけるや」などと詩の後の評語の中で述べており、詩を評論する以外に強烈な道徳的批判が見て取れる。」(同書二〇頁) 嚴氏はこの後で、やはりブルデューの學説を利用して「高雅」と「俗」の對立が批評の張力を高めっていると分析している。

この後で嚴氏は竟陵派をめぐる何人かの詩人の運命を描寫している。最初は竟陵派に傾倒していたが、のちに錢氏のアドヴァイスを受け入れて錢謙益の門下となった商家梅ら數名のケースを紹介している。

最後のセクションでは、竟陵派攻撃のキーワード「詩妖」の使用例を精査したうえで、含蓄のある批評を行つてゐる。「總括すると、錢氏は滔々と雄辯をふるい、筆を斧として用いた。しかし彼が據つた理論的根據、彼が行つた苛刻な批評の操作は、道理のわかつた人たちを心服させるには不十分であつた。しかし、不可思議なことに「歴史」は大いに錢氏の味方をしたようで、彼の從來の鬼面人を驚かす言動は正直誠實な言論に變貌を遂げたのである。竟陵の全盛期(萬曆末から崇禎末の三、四十年間)は、明王朝の

内憂外患、戦争や災害が連続した時代に当たり、最終的には清に滅ぼされた。このようにして、歴史の展開は錢氏の預言を實證することとなつたように見える。錢氏は明滅亡の後、たびたび明末に發した議論を繰り返して語つたが、彼にとつて極めて有利な歴史的状況と密接な關係があつたのであろう。」(同書四〇頁)

(2) 情欲的詩學——錢謙益、柳如是『東山酬和集』窺探

この論文は陳寅恪の巨編『柳如是別傳』の後を受け、錢謙益と柳如是的唱和集である『東山酬和集』を読み解いたものである。読み解きの技法は二人の間にかわされた贈答詩のニュアンス、特にこれまで淡白な形でしか論じられてこなかつた性的なニュアンスをきちんと読み解こうとするものである。

先ず最初に擧げられた詩を見てみよう。

庚申仲冬訪牧翁於半野堂、奉贈長句河東柳氏(庚申の仲冬 牧翁を半野堂に訪い、長句を奉贈す 河東の柳氏)

聲名眞似漢扶風 聲名眞まことに似たり漢の扶風

妙理玄規更不同 妙理 玄規 更に同じからず

一室茶香開澹黯 一室の茶香 澹黯を開き

千行墨妙破冥濛 千行の墨妙 冥濛を破る

竺西瓶拂因緣在 竺西の瓶拂 因緣在り

江左風流物論雄 江左の風流 物論雄たり

今日沾沾誠御李 今日 沾沾として誠に李に御たり

東山葱嶺莫辭從 東山 葱嶺 従うを辭すること莫かれ

嚴氏は首聯において、柳如是が錢謙益を「前に生徒に授

け、後に女樂を列」べた馬融に喩え、「妙理 玄規 更に

同じからず」と錢謙益の佛學にかかわる學識は馬融にもな

いものだと稱賛していると指摘する。さらに頷聯において、

二人が邂逅した室内の皮膚感覺（溫度、嗅覺、味覺、視

覺（仄暗さ）を驅使した描寫、そして錢謙益の書跡を鑑賞

する二人の微妙な位置關係（壁にかかった書跡を二人が肩を

立てて鑑賞しているのか、柳如是が座っている錢謙益の傍らに立

ち、錢謙益の書き物机にかがみこんで書跡をのぞきこんでいるの

いるのか、柳如是が錢謙益から書跡を手で受け取り鑑賞したのか、

あるいは二人はきちんと座りながらも互いの距離を縮めようと無

意識のうちに體を動かし、視線が主觀的に交差したのか(2)を

想像する。頸聯では柳如是は二人の出會いは「因緣」によ

り早くから決まっていたのであり、錢謙益さん、あなたに

は抵抗・拒絶することなどできないはずです、という誘惑

がこめられている。「風流」によって錢謙益の別名「風流

教主」がほのめかされ、さらに「風流宰相」と稱された謝

安にイメージが重ねあわせられ、それは尾聯の「東山」にも

つながり、常に「東山再起」を期していた錢謙益の野望を

暗示する。さらに自分は謝安の家妓「東山之妓」として錢

謙益にお仕えしたい、このような誘いに六十歳の錢謙益が

抵抗しきれはるがなかつたと、嚴氏は解析している。

この論文はこのような分析手法によって二人の贈答詩を

讀み解いており、極めて挑發的なスタイルで書かれている。

錢謙益の密友程嘉燧は、過去に柳如是と交渉があり、彼

女に戀い焦がれていた。同時期に錢謙益の家に滞在し、二

人の詩に次韻した詩「牧翁の韻に次し再び贈る 偁菴」の

尾聯「詩酒已無驅使分、熏鑪茗盌得相從」（詩酒 已に驅使

の分無く、熏鑪 茗盃 相い従うを得ん」に對して、嚴氏は「程氏の詩の中で最も重要なのは、やはり最後の二句であろう、「詩酒 已に驅使の分無し」は、風流韻事（柳如是との情事）についてはもはや分を超えた行いは慎むこととする。以後は錢謙益と柳如是と「熏鑪 茗盃」（香や茶）の趣味でおつきあいをすることにし、自分を老いたる「禪翁」扱いしてくれてかまわない」（同書六〇頁）と解釋を加えている。錢謙益をめぐる交友關係に新たな光を當てていといえよう。^②

「情欲的詩學——錢謙益、柳如是『東山酬和集』窺探」の中盤は、「『東山酬和集』の中で色情的な思想が最も濃厚な作」（同書六三頁）と評される四組の贈答詩を分析したものである。

その時錢謙益は黃山の旅に出ていて、溫泉場に立ち寄っていた。柳如是は茸城に留まっており、錢謙益は溫泉場から柳如是に詩を寄せたのである。

錢謙益の第一作は以下のとおり。

香溪襖後試溫湯 香溪 襖の後に溫湯を試み

書評

寒食東風谷水陽 寒食 東風 谷水の陽
卻憶春衫新浴後 卻って憶う春衫 新浴の後
竊黃淺絳道家裝 竊黃 淺絳の道家裝

嚴氏は言う、「詩の中で一種の暖かな感覺が醸し出されており、この感覺は「溫湯」から來ている。三月の初めに初めて「溫湯」につかり、入浴後なおも全身がリラックスした愉悅につつまれていて、思い起こすのは「入浴後に春衫（評者注：新しい春の季節にふさわしい襦袢）を身につけた」柳如是である。ここで描寫されているのは「竊黃淺絳」（評者注：浅い黄と色浅い赤）の「道家の裝」である。入浴後に道家様式の服を身につけるのは、體をゆったりとさせる意圖があるのだろう。柳如是の「春衫」の下の肉體が、この詩全體にただようけだるく暖かい感覺の中に見え隠れしている。「道家の裝」はもともと清潔感を與えるはずなのだが、このような場面で登場すると、背德的な印象を受ける。「新浴の後」と言っているが、入浴の前、入浴中はどうだろうか？彼女を見つめている人物は？どういう光景が展開しているのか？何はともあれ、柳如是の肉體は呼べ

ば答えるように、見え隠れしているのである。」(同書六四頁)ここまで踏みこんで詩の分析をおこなう嚴氏には敬服の念を禁じえない。

錢謙益の挑發に柳如是は次のように返す…

素女千年供奉湯 素女は千年 湯に供奉す

拍浮渾似踏春陽 拍浮 渾べて春陽を踏むに似たり

可憐蘭澤都無分 憐れむ可し 蘭澤都べて分無きを

宋玉何繇賦薄裝 宋玉 何に繇りて薄裝を賦すや

嚴氏は言う、「柳氏の冒頭の二文字は「素女」であり、その放膽さは人目を引く。傳説の中の古代の女神素女は音楽に詳しく、陰陽を含む天道を理解し、房中術(評者注…閨房の技術)にも長けていたとされる。柳氏は錢謙益の相手はなんと素女であると想定している。第二句の「拍浮」^③に至って凝視の焦點は温泉に浸る素女が動かしている太腿ふとももに移っている。太腿の動く氣配が、太腿の觸覺と溶け合っているのである。「渾べて春陽を踏むに似たり」とは、春の柔らかな日射しが太腿を暖かく滑らかに太腿を包み込む感覺を含んでいる。詩の後半は柳如是の恨み事である。

「蘭澤」(評者注…蘭の香りのする)の温泉は結構なことは結構だが、自分はそれを享受することはできない、と幾分の嬌態を付け加えている。宋玉の「神女賦」は、「被服をうつくししくし、薄裝をうつくし悦しくし、蘭澤に沐し、若芳を含む」と雲夢の浦の神女を描寫しているが、柳氏の結句はこれを換骨奪胎している。詩の結末で、柳如是は薄い衣服を纏った美しいイメージを留めており、詩の焦點を巧妙なタッチで自分に引き戻している。」(同書六五頁)嚴氏の分析は残りの三對の作品にも施されるが、一首また一首とめくるめき讀みが展開される。残りは讀者自ら確かめられたい。

この文章の最後では、『東山酬和集』が開かれたテキストト (open text) として後世に語り繼がれ、加工されていったと結論付けられる。

(3) 哭泣的書——從錢謙益絳雲樓到錢曾述古堂

この論文においては、錢謙益が後事を託した「族曾孫」錢曾(遵王)の事績を題材にしている。彼は錢謙益とは

「情は父子に同じ」く、「牧齋は遵王に學問や詩法を授けただけでなく、一六五〇年の絳雲樓の火災で焼け残った珍藏の書籍を彼に譲った」（同書八一頁）のである。その彼を錢謙益の死後に悲劇が見舞う。牧齋の死後一月餘り、柳如是が縊死し、それにとどまらず、柳如是が娘に遺書を託し官府に届けさせていたのである。

汝の父の死後、是に先んじて某某^{まつた}竝く起頭無きに、竟に來りて面前にて大いに罵る。某某^な還お我に銀有りと道い、遵王を差^{つか}して逼迫せしむ。遵王と某某は、皆是れ汝の父の極めて親切の人なるに、竟に是れ此くの如く我を許くとは：我陰司に懇^{うた}うれば、汝の父は決して一人をも輕しく放さざらん。

このように黒幕の名は出ずに、使喚された錢曾の名だけが出てしまい、錢謙益の有力な弟子たち（顧苓と歸莊）らがそのことを公にして、錢遵王は大きな傷をうけることになる。この事件の真相究明はこの文章の主題ではなく、嚴氏は錢遵王の詩の中に秘められた自己辯護を見出そうとする。

『錢遵王詩集箋校』の著者謝正光氏によると、錢牧齋の死の年以前の錢遵王の詩には錢牧齋との應酬詩が數多く収録されているが、その死後七八年間錢牧齋にかかわる作品は皆無である（同書九二頁）。その事實を踏まえたうえで、嚴氏は錢遵王の後期の詩作（『判春集』）の中から錢牧齋についての記述を丁寧^{ていねい}に拾い出し、分析を加える。例えば「判春詞二十五首、意の至る所、筆も亦たこれに及ぶ。都べて倫次無し」詩においては、詩の本文ではなく自注に次のように言う。

初學・有學詩集箋註庚子の夏に始む。星紀一周、龔^{おん}ね^ね告^{かん}巖^{げん}することを得たり、癸卯七夕後一日、箋註稿本を以て牧翁に就正するに、報章^{へんしやう}に云う、「居るに恆に妄想す、願わくは一の明眼の人を得て、我が爲に代りて注脚を下し、心曲を發皇せしめ、以て百世を俟たんと。今意^おわざりき近ごろこれを足下に得んとは」と。今牧齋翁仙去して數年なり、而るに詩箋は一を掛け萬を漏らす、殊に公の意に副^そうるに足らず。未だ後人これを視て、虎狗雞鳳、これを何等に置くを知らざるのみ。（同書九三頁）

自注の中でしか牧齋の名を出さないことについて、嚴氏は「錢遵王は、自分と牧齋との關係を壓縮もしくは抑壓的な處理を行つていて、故意に詩文の正文の中では直接牧齋の名に觸れなかつたのである。とは言うものの、行間に流れる彼の感情にはかなり激しいものがある。」(同書九六頁)と述べる。行間に錢遵王の感情を讀み取ろうとする嚴氏の試みはかなり成功している。

錢遵王の牧齋に對する感情が比較的ストレートに表現されているのは一六七五年に書かれた「寒食行」(自注に、「寒食の夜、忽ち牧翁を夢む、手を執りて誣謗し、歡逾平昔のごときなり。覺めて此れを作り以て餘の懷を寫す」とある)である。この詩で最も味わいが深いと嚴氏が考へるのは、牧齋の夢を記述した第二段である。

一縷營魂何處飛 一縷の營魂 何處にか飛ぶや
 含凄又到胎仙閣 凄を含みて又た到る胎仙閣
 更端布席才函丈 更端 席を布きて 才に丈を函る
 絮語雄談仍抵掌 絮語 雄談 仍お掌を抵つ
 空留疑義落人間 空しく疑義を留めて 人間に落ち

獨特異本歸天上 獨り異本を持ちて天上に歸す(自注…
 夢中詩箋の疑句を以て相い詢うに、公の引く所の書は、皆餘の知る所の者に非ず。絳雲の祕笈、久しく六丁に下取せ爲れ、これを天上に歸す。)

嚴氏はこの詩についてこう述べる、「錢遵王の「寒食行」の中で、最も味わいに富むのは夢を記述した一段である。牧齋の魂が歸還して、錢遵王と夢の中で出逢う。讀者は覺えておられるであろう、柳如是は遺書の中でこう言っていた、「我陰司に懇うれば、汝の父は決して一人をも軽く放さざらん。」牧齋一門に大きな負い目を背負う錢遵王はこの言葉を思い出すたびに戰慄を覺えていたことであろう。今牧齋が夢に現れ、「手を執りて誣謗し、歡逾平昔のごとく振る舞つた、これは錢遵王が牧齋に背かなかつたことの十分な證明ではないか。この夢は錢遵王にとって重要な夢であり、自己辯護に數等勝るではないか?…錢遵王が錢牧齋の死後懈怠することなく牧齋の文學の整理に當つたのが一種の「自解」(許しを牧齋に求める)の願望であつたとするなら、牧齋が夢の中で彼と「絮語 雄談」し

たり、自分は牧齋に向かつて「詩箋の疑句を以て相い詢」^とい、二人は「手を執りて誣諉し、歡逾平昔のごと」^としというのは、まさに錢遵王の願望が實現したことの隱喩である。さらに「空しく疑義を留めて 人間に落ち、獨り異本を待ちて天上に歸す」の二句の後の小字の注、「夢中詩箋の疑句を以て相い詢」に、公の引く所の書は、皆余の知る所の者に非ず。絳雲の祕笈、久しく六丁に下取せ爲れ、これを

天上に歸す」は、錢遵王が牧齋の文學に注釋を加えるにあたり、なお疑問の箇所や缺陷があり、それに對する遺憾の意を表している。この數語の背後に潜在する心理は細かに分析されねばならない。牧齋が典故として援用した書物の多くは祕笈や善本であり、絳雲樓が火災にあうとほとんど焼き盡くされてしまった。絳雲樓が火災の神の禍に遭つたのは、天命であり、參考にすべき書物が存在しないのは錢遵王の責任ではない。錢遵王は牧齋の委託に背いてはいない、と言っているがこれは牧齋の死後に遺稿の整理に當つたことを指す。遺稿の整理が天意によって不完全なものとなつた責任は、錢遵王にはないのである。これは錢遵王

の「自解」が一層深化したと言えないだろうか？」（同書一〇二頁）このように嚴氏の非常に犀利な分析は我々を驚かせる。

この論文の第四章「絳雲樓から述古堂への記憶と縛」^とでは錢遵王の著書『讀書敏求記』に錢遵王が牧齋を追憶し、「自解」した記録を見出そうとする。「自解」について嚴氏は「自己辯護」以外の意味を賦與する。「というわけで我々は「自解」に對して新しい解釋を施さねばならない。

「自解」にはもちろん「自己辯護」の意味があるが、その他に「自分からの解脱」「自分との和解」の意味もある。我々は錢遵王の自己辯護の言説を探しだすことはできないだろうが、自己との和解、自分への慰撫、自己調整の言説を見出すことはできる。この目的のために、我々は暫時彼の詩から離れて、もう一つの著作のなかに「自解」を探索することとしよう。錢遵王の著作『讀書敏求記』には「牧齋」や「絳雲樓」など牧齋關連の語彙が五十回以上出現する。『讀書敏求記』は目錄學の書物であり、錢遵王がその述古堂所藏の精品のために書いた著録、題記、考證、讀書

割記を収録している。藏書を収録し、藏書を記録していく行爲の中に、錢遵王は「自〇治療」(self-healing)のメカニズムを見出し、牧齋の記憶を整理し再構成し、錢氏の一家を見舞った禍の中で自分が被った心理的な傷を寛解していったのではないかと私は考えている。」(同書一〇二頁)『讀書敏求記』に嚴氏が見出した「自解」の痕跡をすべてあげることとはできないので、その一端を垣間見ることにしよう。

「白氏文集」…樂天は…嘗て一部を録して廬山東林寺の經藏院に置く、北宋の時これを板に鏤はる、所謂廬山本是なり。絳雲樓藏書中にこれ有り、惜しむらくは繕寫に及ばずして、庚寅の一炬、此の本の種子は斷絶し、此れ自ら廬山本を知る者有る無きなり。…戊子、己丑「一六四八—一六四九」、予は日び牧翁に従いて遊び、奇書共に欣賞し、心を駭おどかし目を悦おどばし、蓬山おとに數おとらず。嚴氏は言う、「絳雲樓は歸らず、牧齋も歸つてこないが、述古堂の所藏品は日々に豊富になつてゆき、錢遵王は江南一帶の著名な藏書家となり、述古堂の名は遠近に聞こえた。

牧齋の家の災難で被った嫌疑は晴らすことができないが、藏書家としての營みによつて錢遵王は相對的に潔白な身分を確立し、光榮ある存在たることを勝ち取つたのである。」(同書一〇四頁)

このように嚴氏は『讀書敏求記』という一見無味乾燥な目錄學の書物の中に、錢遵王の心のドラマを縦横に讀み取つており、讀み應えのある論文となつてゐる。

(4) 清初錢謙益、王士禛「代興」說再議

順治十七年(一六六〇)年、王漁洋は揚州府の推官として江南に赴任した。翌年五月、牧齋の甥に自分の詩集と書簡を託し、錢謙益と柳如是に彼の秋柳四首に唱和してくれるよう依頼した。この依頼は柔らかに拒絶されたが、九月、錢謙益の八十歳の祝いの際に王漁洋はさらに書簡と詩集を送つて序文を請うた。錢謙益は一文を草し、長詩一首も併せて贈つた。序文の中で錢謙益は都で同年の友人(關西の文天瑞、清、新城の王象春、季木、竟陵の鍾惺、伯敬)に言及したうえで、文太清、と王季木と都で詩を論じた際に、格調派

の理論を信奉していた二人にその非を説き、文太清が「虞山の言は是なり、顧だ我老いて用いる能わざるのみ」と言ったこと、二人がなくなつて久しいことを述べた上で、有名な一言を書いたのである。

余は八十にして昏忘たり、賄上代興の日に値り、向の鏃礪の知己、古學を用て勸勉せし者、今身に于いて親しくこれを見る、豈に厚き幸い有らざらんや。これを書して以て餘の遭を慶ぶなり。

この「賄上代興の日に値り」を王漁洋は「與君代興」もしくは「代興」として何度も引用し、自分が錢謙益から自分の後繼者指名を受けたという印象を同時代人に與え、我々研究者もそう受け取るのが當然と考へてきた。長くするので考證過程の全貌を紹介することはできないが、嚴氏は「代興」の意義を『春秋左傳』昭公十二年の「齊侯矢を舉げて曰く・酒有りて澠の如く、肉有りて陵の如し。寡人此れに中てなば、君に與りて代ごも興らん」まで遡り、政權交代、季節の變化、文體の變遷、文人が代わる代わる登場することを指すと確定したうえで、續いて錢謙益の詩文

における用例を列擧吟味し、王位の交代、佛門の繼承、文學の世界での世代交代をさすと結論付ける。そしてさらに王漁洋の詩文における「代興」の用例を検討し、錢謙益の用例とつきあわせて、「ある人物がある人物に代わつて臺頭すること」、「ある人物が前の世代に代つて臺頭すること」、「前者であれ後者であれ、世代交代の意味を含む」と、「三つの意味に歸納する。そのうえで、錢謙益の文集を精査して、王漁洋以外に錢謙益が「代興」を期待した例を二人擧げている。その二人とは「明清の際における特立獨行の士」であつた徐伯調と、天啓年間の舉人で陝西の人李楷である。特に後者は牧齋の「李叔則霧堂集序」に「西極の文太清、實は嚆矢爲り。其の後二十餘年にして、叔則代興し、人咸な太微の冢嫡なりと謂う。」とあり、王漁洋同様、「代興」の二文字が使われている。嚴氏は様々な材料を擧げた上で、王漁洋の「代興」は格調派に毒された前の世代王象春、文翔鳳らの缺陷を克服しえており、それを言祝いだ表現であるとし、李楷（叔則）の「代興」は「まだ前七子・後七子の餘風が残る關中で「代興」し、虞山の

學を傳承してくれ」という意味であり、錢謙益が本當に後

繼者として指名したのは、王漁洋に非ず李楷であったという獨創的な結論を下している。この論文の「後記」には王漁洋が錢謙益に書簡を送り、詩文集に序を請うていたのとまさに同時期に、徐禎卿の詩集『徐昌穀全集』に「此の卷は昌穀未だ空同に遇わざる時の作多く、一として取る可き無し。牧齋は顧だこれを取る、豈に眯目の人白黒を道うならんや」という牧齋に對する手厳しい批語を書きつけていたことが紹介されている。^④後に王漁洋が錢謙益に對してかなり手厳しく批判したことは周知の事實だが、詩壇の大先輩に辭を低くして序文を依頼していた折も折、このような批判的見解を書きつけていたとは思ってもみなかった。從來の王漁洋に對して評者が抱いていたイメージが大きく變わったことも付言しておきたい。

(5) 錢謙益遺著於清代的出版及「典律化」歷程

この論文は錢謙益の遺著が清代において出版されたプロセスとそれがいかに受け入れられたかという受容史を扱

う。

牧齋の死後、牧齋が明と清の間を搖れ動く、評價がことに難しい生涯を送り、その詩文集の内容も、清朝の忌避に觸れるものが多かったため、誰が牧齋の遺稿を整理するかが大問題となり、結局最後に錢謙益の委託を受けた錢遵王が整理を擔うことになった。錢遵王は例の錢謙益没後のトラブルに巻き込まれ、「獸曾」と罵られることとなり、そうであればこそ錢謙益の門生の大半は遺稿整理にかかわらなくなつたと嚴氏は述べる。さらに祭文や墓誌銘を誰に頼むかという問題も生じた。臨終の床に錢謙益を見舞つた黃宗羲はあいまいな返事をして立ち去り、結局墓誌銘を書かなかつたし、その死後五百年間結局錢謙益の墓誌銘はついに書かれることはなかつた。^⑤錢謙益の古くからの友人で、錢謙益・屈大均とともに江南三大家と稱された龔定孳（六一五—一六七三）は錢謙益の祭文（祭虞山先生牧齋錢學士）を書いたが、やはり相當書きにくかつたらしく、苦心の跡が見える。嚴氏によると、祭文は次の構造から成る。

(一) 錢謙益の文學が不朽の價值 (The immortality of litera-

the) を持つことを稱賛する。「芝麓は牧齋の著作に對して極めて高い評價を與え、牧齋の「文學的不朽性」(Literary immortality) を稱揚する。芝麓は上下千年の文學の道統に位置付けるとすれば、唐宋の韓愈、歐陽修、近くは明代の宋濂と歸有光に比擬する。」(同書一七六頁)

(二) 錢謙益の「才」と「志」を稱揚する。「斯の人を以て宰相を得ず、終に列卿に老ゆるとは、誠に數奇爲り。」芝麓は牧齋が宰相の地位に昇り政權の中樞で活躍できなかったのを惜しんでいる。」(同書一七七頁)

(三) 明清交替期の錢謙益の出處進退については節を失つたとする世論に配慮してあいまいな書き方に終始し、「親しき者の爲に諱み、長者の爲に諱」んでいる。

(四) 最後の段落では、清朝に投降した後、『列朝詩集』をはじめとする充實した著作活動に觸れる。

(五) 末尾では、「於戲、先生の生くるや、名高く望大なり、豈に天の此れを豊にし、彼に嗇しむ、仕路の迥邇と夫の衆口の警訾とを免るること難し。先生の死するや、これを誇りこれを誦る者、固より當に喙を蓋棺に息むべきも、

尤も掩抑すること能わず、其の文苑の宗師に非ずと謂う。

深く痛む可き者は、産を斥りて鈔然たり、幅巾盡くるを待つ…と死後の彼の家の災難と、彼に對する誹謗中傷に觸れて終わる。龔定孳は錢牧齋を「皇清嘉議大夫禮部右侍郎管內翰林祕書院學士事虞山牧齋錢先生」と稱し、自らを「通家後學都察院左都御史」と稱しているのは「皇帝權力(imperial authority)——當時はすでに大清の皇帝權力であつた——と牧齋の官に就いている門生の勢力を借りてこの危機に對處しようとしたのだろうか？だとすれば芝麓は故人に對し天地に恥じるところがないと言えるだろう。」(同書一八二頁)と嚴氏は評している。以下、歸莊の錢謙益に對する評價、清代に入つてからの牧齋の詩文の結集、錢遵王牧齋詩注の凌鳳翔序文に見られる、錢謙益を文學史上に位置付けようとする早い段階での試み、沈德潛『國朝詩別裁集』の冠首に錢謙益が置かれたことの意味と『國朝詩別裁集』が起こした大きな波紋、清末の思想家章炳麟が排滿思想を鼓吹する中で見出した錢謙益の利用價值、清末に於ける錢謙益の發掘と救出、清朝滅亡の直前における牧齋の

著作の出版などの諸問題が丁寧に説明され、錢謙益の人物像や評價の變遷、錢謙益の著作の受容史が手に取るように分かるようになっていた。

(6) 權力意志・清高宗乾隆帝譏斥錢謙益詩文再議

この論文は(5)の論文の第六章と深いかわりを持つ文章である。

乾隆帝が錢謙益を批判したことはよく知られている史實である。嚴氏は乾隆帝が自分は「聖天子」であるという自負、歴史・文化の最高審判者としての自負を抱き、臣下は忠義と貞節を信奉し、二君に仕えるべきでないという臣下の節義に關する觀念を持ち、ひそかに錢謙益と文明の擔い手として高下を争う心理があったと指摘する(同書二三八頁)。そこで嚴氏はこれまで注目されてこなかった乾隆帝が作った錢謙益に關する古今體詩などの資料を解讀して、乾隆帝の牧齋批判の實情を探り出そうと試みている。

嚴氏は先ず乾隆帝が錢謙益を批判した詩文の年表を作成する。『清實錄』高宗純皇帝實錄、『御製詩集』、『文集』

を調べると、乾隆二十六年から五十四年(一七六一—一七八九)の二十八年間に、牧齋に關する(直接牧齋に對して發せられたもの、牧齋に言及しているものをすべて含めた)文書は、諭・令は少なくとも十九件、詩は十二題十五首ある。ここに以下のように年表を製作し、全體をうかがい見ようと思ふ。(同書二二九頁) という年表は3ページにわたり、これまで私も漠然とした知識しか持っていなかった乾隆帝の錢謙益批判の全體像をつかむことができるようになったのである。

時系列的に並べると、最初に來るのは乾隆二十六年の記事で、(5)でも取り上げられていた沈德潛『國朝詩別裁集』にからむものである。嚴氏によればこの時點で乾隆帝はまだ錢謙益の『初學集』『有學集』を通讀しておらず、錢謙益に對する批判はまだ「溫柔」である。乾隆二十六年の諭令の中で乾隆帝は、「伊は前明に在りて曾て大僚に任ぜられ、復た國朝に仕う、人品尙お何ぞ論ずるに足らんや？即ち詩を以て言わば、其のこれを明末に還すに任さば可なるのみ、何ぞ引きて開代詩人の首と爲すを得んや」と錢謙益

に對する辛い評價を述べている。

乾隆三十五年の「錢謙益の『初學集』を觀て因りて句を題す」が分水嶺となつたと嚴氏は判斷する。

平生談節義 平生 節義を談じ

兩姓事君王 兩姓 君王に事う

進退都無據 進退 都べて據る無く

文章那有光 文章 那んぞ光有らんや

眞堪覆酒甕 眞に堪えたり酒甕を覆えすに

屢見詠香囊 屢ば見たり香囊を詠するを

末路逃禪去 末路は禪に逃れ去る

原爲孟八郎 原もと孟八郎爲り（自注…禪宗において真空

妙有を解さざる者を孟八郎と爲す）

この詩を嚴氏は、「…牧齋は確かに詩文で朝廷の安危や名士の節義を語るが、乾隆からみるとこの節義ばかり口にする人物は「兩姓 君王に事」えた人で、言行不一致、臣下としての節義は皆無である。このように進退に根據がなく、大義に缺けている人物は、根本が失われているのだから、その文章は讀む價值がない。牧齋の道德、文章、「香

囊を詠」じた情愛の詩を一概に否定している。最後に牧齋のもう一つの側面である禪宗への逃避を、追いつめられた行動にすぎず、佛教の眞理については無知であると攻撃している」（二四八頁）と解析している。

「それ以後乾隆は牧齋に對して罵詈雑言を極める。この事態の新展開は突然の出來事ではない。その前の年、乾隆三十四年（一七六九）、牧齋は清王朝の最も密度の濃い、厳しい批判にさらされる。その年の六月から十二月にかけて、半年のうちに乾隆は牧齋に關して六回發言し、全力で批判を行つてゐる。1769-A-Fの六件のうち、前の四件は乾隆の論旨であり、牧齋の『初學』『有學』二集は「荒誕背謬」であり、ここかしこに「本朝を詆謗するの處」がある」（同書二七四頁）と嚴氏は指摘し、さらに「此れ等の書籍は、理に悖り義を犯し、豈に其の流傳を聽す可けんや、必ずや當に早に銷燬さ爲べし」と指示し、清の朝廷が牧齋の著作を燒却する事業はこの時點から正式に始まつたのである。」（同書二七五頁）と嚴氏は推理している。

第三段階では錢謙益の著作の燒却作業はすでに終了し、

乾隆帝は明朝に殉じた忠臣と明に反逆し清に投降した貳臣とを峻別し、貳臣も洪承疇ら明朝に背いたものの、清朝には忠實であった甲編と、明朝に背いたが清朝にも忠實であったわけではない乙編に分けられ、錢謙益は貳臣乙編の典型として何度も取り上げられ、再利用 (reuse) の價值を乾隆帝からみとめられるようになり、「清の皇帝が古今の歴史を評價する標準と化した。」(同書二七七頁)のである。

最後に嚴氏は乾隆帝の詩作は「最初から最後まで「政治界」(評者…ブルデューの用語)の産物であった。乾隆は専横、野蠻にも文學界(これもブルデューの用語)の文化生産の自主性、自律性、詩人の魂の尊嚴を奪った」(同書二八五頁)と断定し、乾隆帝が憧れた唐の太宗が本物の詩人であったのに對し、「乾隆帝の詩文の中に我々は唐の太宗のよいうな詩と政治の間の張力 (tension) は見られない。乾隆の詩は本論文で引用したものについて言えば、政治的な擴聲器に過ぎず、君主としての「權力の意志」に満ち溢れ、耳を聳せんばかりである。花は花に非ず、霧は霧に非ず。乾隆は詩人ではなかった。彼が詩のスタイルを通して打ち建

てたかったのは絶対的な、古今に冠絶する聖なる帝王のイメージであった。」(同書二八七頁)と結論付けている。

最後に評者は讀者の皆さんに「(6)權力意志…清高宗乾隆帝譏斥錢謙益詩文再議」と古原宏伸氏の「乾隆皇帝の畫學について」(『中國畫論の研究』⁶⁾所收)を併せ讀まれることをお勧めする。嚴氏の論文が乾隆帝の文學の分野での「權力の意志」の行使を論じたものであるとすれば、古原氏の論文は古畫の鑑識を中心とする乾隆帝の畫學を論じたもので、互いに補い合っているからである。

(7)近代上海『申報』中錢謙益的身影

『申報』は、一八七二年に創刊され、一九四九年に停刊されるまで77年続いた雑誌である。嚴氏は『申報』は營利目的の大衆向けの商業新聞である。『申報』に掲載された文學作品は、中國の近現代文學に大きな影響を與えた。『申報』を利用して、牧齋のイメージと受容について比較的長いスパンの觀察を行い、我々の清初、乾隆(十七、十八世紀)以後の牧齋の認識を補おうと考える」(同書二九一

頁」と述べ、『申報』を一種の定點觀測の場として、錢謙益のイメージの變遷を辿ろうと試みている。

『申報』に錢謙益が登場するのは、一八七二年十月二日の二頁に掲載された「吳興趙忠節公覆僞忠王李逆書並絶命辭四律（附和詩及來書）」である。趙忠節公は太平天國の亂の際に太平天國の忠王李秀成に囚われた郷紳の趙景賢のことであり、彼は太平天國への歸順を拒んで殺された人である。李秀成が趙景賢に歸順を勧めた書簡の中に錢謙益の名が出てくる。この書簡は佚亡したが、趙景賢の復書にそれに言及した部分が残っていた。「來書は洪承疇、錢謙益、馮銓の輩を引及す、當日已に士林の齒せざる所、清議の容れざる所と爲る。純皇帝『貳臣傳』を御定するや、名は首列に在り。此等の人何ぞ比數するに足らんや……」このように錢謙益の最初の登場は單獨ではなく、「雅集」（他の人物とともに）においてであった。このように嚴氏は一八七〇年代の『申報』の錢謙益に關する詩文を丹念に拾い上げ、牧齋を詠じた詩は、「其の才を愛する」、「其の遇を哀しむ」、「其の行を鄙しむ」の三つの要素に歸納されるが、重點は

もちろん「其の行を鄙しむ」に在り、詩人たちは自己規制、自己抑壓の状態にあつたと結論する。

近現代の『申報』掲載の詩はやはり一八七〇年代の詩の單調な歌いぶりを踏襲し、「千篇一律で、個性に缺ける」と嚴氏は述べた上で、この時期の牧齋についての筆記が「艷聞」と「衆に示し辱めを受けしむ」の二つの要素から構成されると觀察する。『申報』（一九四七年十一月十六日）「自由談」に載つた「兩朝領袖」がその典型的なものである。

牧齋既に柳如是を娶り、寵愛すること神仙の如く、爲に別に精舍を築きてこれを居らしむ。其の室に顔して「我聞」といい、『金剛經』の「如是我聞」の義を取るなり。一日これを挈けんずえて虎邱に遊ぶに、牧齋の衣は小領にして大袖なり。一士人前みて揖するに遇い、此れ何の服制なるやと問う、牧齋曰く、「小領は新朝の法服爲り、大袖は先朝を忘れざるを示す所以なり」と。士人諺いづわりて爲に容を改めて曰く、「公は新朝に事え、尙お故國を忘れず、用心良はなはだ苦くめたり」と。牧齋大いに窘くむ。

筆記の作者は「道徳に基づいて裁く裁判官」になりたいという自分の欲求をみたし、大衆の渴望をも満足させ、かついくらかの稿料も手に入るといふわけで、牧齋のある種の市場價值が成立していたことを證明しており、このような形で錢謙益は「不朽」の存在となったと嚴氏は述べている（同書三二八頁）。以下『申報』にのつた錢謙益に關する學術講演の廣告、小説の題材となつた錢謙益などを紹介した後で、「一八七二年から一九四九年の『申報』には重大な意味を持つ牧齋に關する作品は掲載されることはなかつた。おおよばに言へば、平和な時代には、牧齋の逸話や艶聞に關する作品が主であるが、國家が危機に瀕したり對外戰爭が起ると、牧齋の「貳臣」の身分や事跡が人々の執筆活動の中心となる」（同書三三八頁）と概括している。

(8) 春秋有變例、定哀多微辭——試論錢謙益之論次麗末東國史及詩

この論文は『列朝詩集』の閩集朝鮮の條の、鄭夢周、李穡、李崇仁、鄭樞、金九容及び鄭道傳の小傳を論じたもの

である。朝鮮の人々の小傳は高麗王朝から朝鮮王朝への交替期における高麗王の弑逆事件と關連する。

高麗王朝の最後の四人の王（恭愍王、禑王、昌王、恭讓王（瑤））は李成桂が弑逆したという説があり、朴洋撰とされる『東國史略』では、李成桂には觸れず、次のように述べる、

禍淫は醜にして虐を肆はしりまにし、昌は又た昏弱なり、天は狂狡の徒をして名器を奸穢せしめず、徳有るを待ちてこれを昇たり、其の意は昭然たり。忠臣義士、必ず王氏の後を求めてこれを立てんと欲し、是に於いて恭讓王は軒席の上を離れず、起ちて寶位に登る。

問題をややこしくしているのは、恭愍王には子がなく、佞臣辛トがその婢に産ませた子を自分の子（恭愍王）と偽つて辛禍と改名させ、恭愍王が弑逆されると、辛禍が立つて王となった。さらに辛禍が弑逆されると、辛禍の子を立てるべきか、宗親を立てるかをめぐつて爭議が起こつた。

そこで當時の名儒であつた李穡が意見を求められて、「當に前王の子を立てるべし」と應え、昌王が即位したという

史實である。^⑦ 實は朴洋は『東國史略』のこの段を書くにあたりかなり躊躇していたらしく、そこに「王氏の後を求めてこれを立てん」と主張した義士の一人李穡（牧隱）の夢を見、詩を授かった。その中に「史家筆を秉る 公は何れに在るや」という一句があり、朴洋は『東國史略』で、李穡（牧隱）が人に語ったという言葉、「昔晉の元帝入りて大統を繼ぐ、胡致堂論じて曰く、「元帝姓は牛なるに、晉宗を續ぐ、群臣何を以てこれを安んずるや？ 胡羯交こもも侵し、江左微弱、若し舊業に憑依せざれば、安んぞ能く人心を係屬つなげんや。勢いに乘じ事を就す、已むを得ずして爲す者なり云々。」を引き、「今穡の辛氏に於けるや、敢えて異論有らざらん者は、亦た此の意なり。」を引いて、李穡の言動を高く評價している。牧齋は『列朝詩集』の李穡の小傳を書くにあたり、『東國史略』を主要な材料として用い、李穡傳の末尾で次のように言っている。

高麗は玄陔自り君ならず、政は李氏に歸し、穡は夢周と昌を立て禍を擁し、社稷を李成桂の手より奪い、王氏一綫の緒を延ばさんことを思う。『東史』は其の夢周と心

書 評

を同じくし、終始臣節を變えざるを稱う、忠と謂わざる可けんや。成桂の放弒（評者：放逐と弒逆）、辛氏を以て口實とす、『東史』亦た曰く、「宋儒は元帝は本と馬宗に非ず、東晉の大臣國勢の歸する有るを以て、已むを得ずしてこれを安んず。穡の辛を立つるに於いては、敢えて異議をせず、亦た此の故なり」と。李氏政を専らにすること年有り、國論手に在り、國を竊むこと二百餘年、皆其の臣子なり。悠悠千古、誰か與に牛馬の是非を辯ぜんや。定哀微詞多し、『東史』もこれ有り。學は四夷に在り、詎んぞ然らざるや。

嚴氏によれば、錢謙益は『史略』の次の二點を稱賛している。一つ目は、「鄭夢周と李穡が志を同じくする同志・忠臣であり、協力して衰え行く高麗王朝を支えようと努力し、臣下としての節を變えなかつたことをきちんと顯彰している」點である。二つ目は、『史略』の作者が、隠された筆法と敘述の戦略を用いて禍王、昌王の罷免、繼承の過程で彼らが演じた役割と言論を『史略』の中で巧妙に描き出しており、それを讀んだ讀者が李穡の當時の隠された苦

衷を理解できる」(同書三四八頁) 點である。

この論文の第二章「錢謙益の『朝鮮』詩編集に含まれる『史意』」では、『列朝詩集』の朝鮮の條を編纂するにあたって重要な資料となつた『朝鮮詩集』と『列朝詩集』を比較し、前者には小傳がないこと、前者以外にも錢謙益が使つた資料が存在したこと、小傳は『史略』を錢謙益が巧妙に切り張りしてできたことを嚴氏は指摘する(同書三五一頁)。さらに錢謙益の意圖として、『列朝詩集』で取り上げられた鄭夢周、李穡、李崇仁、鄭樞、金九容ら忠臣の事跡を讀むことによつて、王朝交替の全貌が見えてくる仕組みになっている點があげられる。最後に付された鄭道傳は貳臣であり、忠臣たちと強烈に對比されている。また面白いのは鄭夢周の詩の取捨選擇を論じた部分で、錢謙益は鄭夢周の豪邁な作風の詩を切り捨て、王事に奔走する苦勞を詠つた詩を主に採用しており、彼を「悲劇的英雄」(a tragic hero)として描き出そうと試みている、という嚴氏の指摘である。これは『列朝詩集』全體についても言えるかもしれないと評者は考える。

「『列朝詩集』を錢謙益が編集するにあたり、本來「詩を以て史を存す」という「詩史」(政治史とさへ言えるかもしれない)を編纂しようという意圖があつたが、この朝鮮詩の部分はまさに錢謙益が歴史家の本領・精神を發揮して、勸善懲惡の本旨を託し、毀譽褒貶の權利を行使したものである。(もしさらに一步進んで推測するならば、明王朝は清王朝に滅ばされたので、感情が轉移して朝鮮王朝の李氏が王氏の高麗王朝を篡奪したのを特に恨むようになり、筆誅を加えたのである)か、その可能性も否定できない。)これによれば、牧齋が以上の小傳を書いた時に、特に力を入れ、明らかな感情移入をおこなつたことは理解できる。牧齋が選んだ高麗末、朝鮮初の人々の詩は、以上の論が誤っていなければ錢謙益の毀譽褒貶、人物評價のストラテジーの文脈・視野の中で理解せねばならない。」(同書三九六頁)これが嚴氏の最終的な結論であるが、錢謙益の歴史家としての力量を測る上で、この論文は正確な水準器となるであろう。

(9) 典午陽秋、休聽暇豫——朝鮮文士南九萬所述錢謙益詩考

論

この論文は朝鮮の使節南九萬が康熙二十三年（一六八四）に命を奉じて中國に使いた際の記録『甲子燕行雜錄』の一段から始まる。

館中愁寂たり、取りて冊舖の賣る所の小説を見れば、則ち陳亡びし後衣冠子孫隋室に仕えざる者を借りてこれが説を爲し、詩を作りて曰く、「民間 定めて有らん 劉文叔^⑧、世外 那んぞ無からん 張子房」と。又た一畫廚を見る、天子と宮人、宦官四時に隨いての淫樂の狀を畫くも、其の冠服は皆清制なり、末に題して曰く、「成化二十二年（一四六八）太平遊樂の圖」と。乃ち是れ成化に假託するも、實は朝に當る者を譏るなり。人心の在る所抑も知る可きなり。又た錢牧齋謙益の人に與うる詩を見るに云う、「請う見よ典午陽秋の例、載記 分明にして琬琰垂る」と。又た云う、「知る君の王哀傳を讀むを恥ずるを、但だ生徒をして蓼莪を廢せしめよ」と。此の如き等の作、板に鏤り流布せしめて、以て罪と爲さず、豈に北人は文無く、これを見るも覺らざるや？

書評

嚴氏によると、前の詩句は「徐禎起に和す」と「侯研徳に簡し并びに記原に示す」の二首であり、兩方とも「冬夜假我堂文宴の詩（序有り）」十一首のうちの二首である。嚴氏は、南九萬はなぜこれらの詩句が清朝の忌避に觸れると考えたのかを實に丁寧考證してゆく。以下その手際を見ていこう。

先ず「徐禎起に和す」から。徐禎起、名は晟、長洲の諸生で明の遺民であり、假我堂文宴の後に牧齋の家塾の師となつた。

老學依然炳燭時	老學	依然として燭を炳す時
杜詩韓筆古人師	杜詩	韓筆 古人の師なり
崑岡玉石吾何有	崑岡	玉石 何か有らん
東海滄桑某在斯	東海	滄桑 某は斯に在り
草野不忘油素約	草野	忘れず油素の約
蕉園終見汗青期	蕉園	終に見る汗青の期
請看典午陽秋例	請う看よ典午陽秋の例	
載記分明琬琰垂	載記	分明なれば琬琰垂れん

以下嚴氏の解釋に従つて讀むと次のようになる。

首聯は、老いてもなお學に勵む牧齋の自畫像である。夜も蠟燭をともして讀書にいそしみ、詩は杜甫、文は韓愈という正宗を學ぶ。

頷聯は、文宴で皆さんは自分を碩學の宿老と推してくれろが、自分は「崑岡の玉石」（崑崙山の玉石）のような才藝をもっているわけではないと謙遜したうえで、東海が桑田に變るような國家の激變の目撃者がここに在る（某は斯に在り）と表明している。^⑨

頷聯は、自分は「草野」にあり、史官の職にはないが、なおも「油素の約」^⑩（評者・牧齋と宴會に参加した人々がかわした、これからも著述活動を續けていくという「約」）を忘れることはない。「蕉園」は明の太祖實錄が完成すると、草稿がそこで焼かれたという北京の太液池の東の地名であり、「終に見る汗青の期」は『史通』忤心篇の次の典故を踏まえる。「一事を記し一言を載せんと欲する毎に、皆闕筆して相い視、毫を含みて斷たず。故に白首期すべく、汗青日無し。（一事一言を記録しようとするたびに、筆を手から離して互いに見つめあい、筆を口に含んで判斷しようとしなさい。だから

白髪頭になってようやく完成することを期し、完成には程遠い）嚴氏は、「劉知幾のこの言葉は史館修撰官に向けて發せられたものであり、彼らがあまりにも慎重で誰も責任を取ろうとせず、お互いに押し付けあつていたので、年老いても史書がいつ完成するか分からない。牧齋がこの典故を使つたそのわけは、非常に奥深いものがある。宴會に連なつた人々に、協力して事を行えば成果は必ず上がると勵ますのが、これが一つ目のポイントである。「東海が桑畑に變化する」この時代に、官僚たちは節操を失い、「官史」には期待できない、草野の士が著す「野史」や「私史」(Private History)は愈々貴重である。また、錢牧齋は劉知幾の「一家獨斷」の學を推賞しており、劉知幾を本々高く評價していた、ということを告白しているのが二つ目のポイントである。」(同書四〇六頁)と分析している。つまりこの詩の焦點は史學それも野史に向けられているのである。

そして最後の一聯がくる。「請う見よ典午陽秋の例、載記分明にして 琬琰垂れん」これは何を意味するのか？ 嚴氏は以下のように解説する。「典午」は「司馬」の隱語

であり、「陽秋」とは「春秋」に同じであるから、「典午陽秋」は「晉書」を意味する。「典午陽秋」を『晉書』と解することができれば、次の「載記」ははるかに分り易い。

『晉書』には載記三十卷が付載されていて、『二十二史劄記』に「『晉書』 僭諸國數代相い傳える者に於いて、世家と曰わず、載記と曰う。」とあり、牧齋の詩の中の「載記」は、後漢書の公孫述の條のように、本紀でも列傳でもないものと呼ぶ汎用の言葉としての「載記」ではなく、あくまで『晉書』の「載記」の文脈で解釋されなければならぬと嚴氏は述べる。「琬琰」は遵王の注に言うような「君子が帯びるべき美玉」ではなく、「石碑」の美稱としての「琬琰」でなければならぬ¹²。嚴氏は次のように結論付ける、「まとめて言えば、錢謙益のこの聯は、宴會に集った諸氏に、明清の際の史書を編纂する時には、春秋の華夷の別を守り、明を尊び、清を排撃し、『晉書』が「北狄」を處理した書法と義例に則って、毀譽褒貶の深意をその中に込めなければならぬと要請しているのである。」¹³（四〇九頁）これで南九萬が『甲子燕行雜錄』で「反清」

の嫌疑があるのではないかと指摘された牧齋の二つの詩句の一つの詩句の解釋が終わった。もう一つの「知る君の王衰傳を讀むを恥じるを、但だ生徒をして蓼莪を廢せしめよ」の解釋もあまりにも面白いので煩を厭わず紹介しよう。

「侯研德に簡し并びに記原に示す」の原詩は次の通りである。

當饗休聽暇豫歌 饗に當りては聽くこと休かれ暇豫の歌
破巢完卵爲銅駝 破れし巢に卵完きは銅駝の爲なり

國殤何意存三戸 國殤 何の意ありて三戸を存するや
家祭無忘告兩河 家祭 忘るる無かれ兩河を告ぐるを

擊筑淚從天北至 筑を撃ちて淚は天北從り至り
吹簫聲向日南多 簫を吹きて聲は日南に向かうこと多し

知君恥讀王衰傳 知る君の王衰の傳を讀むを恥ずるを
但使生徒廢蓼莪 但だ生徒をして蓼莪を廢せしむるのみ

嚴氏によれば、侯研德、初名は玄泓、または玄涵、號は掌亭。明の諸生であつた。記原は侯研德の兄の侯玄沆、號は甲寅再來人等、彼らの父侯岐曾は清軍に抵抗して殺された人物であり、その兄侯岐曾も嘉定を守備した人で、嘉定

が陥落すると、入水自殺を遂げたという忠臣たちである。この事實を踏まえた上で嚴氏は「侯硯徳に簡し并びに記原に示す」詩の解釋を進める。

首聯の「饗に當りては聽くこと休かれ暇豫の歌」は『國語』晉語二の典故を引く。晉公の愛姫驪姫が太子申生を殺そうと謀った際に、公の許諾は得たのだが、里克の邪魔が入るのではないかと恐れ、俳優の優施に里克の意志を探らせる。優施は里克の家に行き、宴會の際に謎を掛けた歌をうたう、「暇豫の吾吾^⑭たるは、鳥鳥に如かず。人は皆苑に集うに、己は獨り枯に集う」と。里克は悩んだ末、夜中に優施を呼び寄せて、太子を殺す陰謀があるのかと尋ね、優施はすでに公も賛同しており、既成事實となっていることを教える。里克は、「吾君を乗りて以て太子を殺すは、吾は忍びず。故交に通復するも、吾は敢えてせず。中立すれば其れ免がるるや？」と再度尋ねたところ、優施は「免れん」と一言だけいう。

首聯の第二句、「破れし巢に卵完きは銅駝の爲なり」では錢謙益は『世說新語』言語篇の孔融の故事を引く。孔融

が曹操の命で收監された時、使者に二人の子供だけは助けしてほしいと言うと、子供は「大人、豈に覆巢の下復た完卵有るを見んや？」と述べたとある。「銅駝」は『晉書』索靖傳の「靖は先識遠量有り、天下將に亂れんとするを知りて、洛陽の宮門銅駝を指し、歎いて曰く、會に汝の荆棘の中に在るを見るべきのみと」を踏まえて、都、宮廷を喩える。これと初句をあわせると、一族が數多く明朝のために殉じたが、君たち（侯氏の兄弟）が生き残ったのは國家（明）のため有用な人間だからだ、その君たちは里克のように「中立」の立場をとってはならない、と解される。

領聯「國殤 何の意ありて三戸を存するや」について、「國殤」は『楚辭』の「九歌・國殤」に基づく。王逸注には、「國事に死する者を謂う」とあり、次の「三戸」と密接に關連している。『史記』項羽本紀に、「故に楚の南公曰く、「楚は三戸と雖も、秦を亡ぼすは必ずや楚なり」と」とあり、「集解」は瓚を引いて、「楚人秦を怨む、三戸と雖も猶お以て秦を亡ぼすに足る」と言っている。嚴氏は言う、「侯峒會には三人の息子がいた。玄演、玄潔、玄澣である。

嘉定の虐殺で、玄演と玄潔は死亡し、玄澗は逃れることができた。侯岐曾には三人の息子がいた。玄汭（記原）、玄洵、玄泓（研德）である。記原と研德は僥倖にも生き残った。天地がひっくり返るような情勢下、侯氏にはびったり「三戸」が残ったではないか。牧齋の詩句は恐ろしいほど表現が的確である。（災厄から三年後に玄澗は亡くなり、子がなかったので記原が後を嗣いだ）では「國殤 何の意ありて三戸を存するや」はどのような意味になるのか？牧齋は「秦／清」を亡ぼすのは必ずや「侯」ではないのか、と問いかけているのではないか？」（同書四一七頁）嚴氏の分析は益々鋭さを増してくる。

頌聯第二句の「家祭 忘るる無かれ兩河を告ぐるを」は、もちろん宋陸游のよく知られた句「王師 北のかた中原を定める日、家祭 乃の翁に告ぐるを忘るること無かれ」を踏まえる。錢遵王の注はさらに『宋史』宗澤傳「澤憂憤し、疽背に發す、一語も家事に及ばず、但だ河を過ぎよと呼ばわること三たびするのみにして、卒す」を引く。嚴氏はこの注が特に優れていると述べた上で、「南宋の名將宗澤は、

岳飛を重用して北伐し、何度も高宗に都を遷して開封に歸還するよう勸めたが、後に金軍を敗北させることができなかつたため、憂憤のうちに亡くなつた。牧齋の句は「乃翁」を「兩河」に變えている。宋代には河北・河東地區を「兩河」と稱した。陸游の「感憤」の詩に、「四海一家は天の歷數なり、兩河 百郡 宋の山川なり」とあるのを見れば、「兩河」は大宋の領土をいうのである。牧齋の「兩河を告げよ」云々は、研德が家祭を行う時、王師がすでに中原を回復し、「九州が同じ」くなり、明室が復興したと告げよ、という意味であると考える。牧齋のこの二聯はまさに衝撃的である。

頌聯の「筑を撃ちて涙は天北従り至り、簫を吹きて聲は日南に向かうこと多し」は評者のような素人にも分かり易い。「筑を撃」つとは刺客荆軻が秦へ出立しようという時に、易水のほとりで送別の宴が行われ、高漸離が筑を撃ち、荆軻が唱和したという故事を踏まえ、「簫を吹く」とは、復讐心に燃えた伍子胥が楚から呉に亡命し、市で箎を吹いて糊口をしのいだ故事を踏まえる。嚴氏の解釋では、頌聯

は清（秦・楚）に復讐しようとする聲が天下に滿ち溢れていることを意味する。

いよいよ問題の尾聯「知る君の王哀の傳を讀むを恥ずるを、（王哀は）但だ生徒をして蓼莪を廢せしむるのみ」である。

王哀は晉の人で、字は偉元、西晉の人。博學多能で、父が司馬昭に殺されたことを怨み、晉には仕えないと誓った。隱居して子弟に教授し、父母の墓の傍らに庵を作つて暮らした。『晉書』王哀傳によると、「詩を讀んで「哀哀たる父母、我を生みて劬勞す」（小雅・蓼莪）に至り、未だ嘗て三復して流涕せずんばあらず。門人受業する者、竝びに蓼莪の篇を廢す」とある。嚴氏は、「知る君の王哀の傳を讀むを恥ずるを」は、研徳が王哀を行動規範としていないと牧齋が言っているのである。王哀が「蓼莪」の「哀哀たる父母、我を生みて劬勞す」を讀んで涙を流し、門人が彼に同情して「蓼莪」を讀まなくなったという典故を錢謙益が引いたことについて、「此れを讀まば泓を知る可し」と考える論者もいるし、「侯涵兄弟と王哀を比べている」という

論者もいるし、「この兩句は、侯研徳が王哀が父の墓を大切に思い、故郷を離れようとしなかったのを規範とせず、抗清運動に身を投じたことを稱贊している。ただ自身が蓼莪を讀まず、學生たちにも蓼莪を讀ませなければそれでいいのだ」と解した論者もいる。このような解説は、詩句の表面上の意味に従い、想像を加えて得られたもので、まあそうに違いないという程度の議論であり、事實とはかけ離れている」（同書四一九頁）と斷定したうえで、頁數の關係で嚴氏の考證の詳細は省くが、侯研徳は文宴の席上、隱居の志を述べたため、牧齋はそれに反發しこの詩を作つたのである。侯氏一門の忠烈な事跡を特筆大書し、研徳に明王朝の復興を志し、父の復讐を果たすべきであり、決して王哀のように隱居して、消極的に世の中から逃避しないように研徳に勧めていると嚴氏は解釋している（同書四二〇頁）。朝鮮文士南九萬の紀行文をきっかけに書かれたこの論文はまさに上質なイギリス風ミステリーを思わせる筆致で書かれており、評者の最も愛する一編である。

『牧齋初論集』はこれまであまり試みられなかった方法と着想で書かれており、一篇一篇どれをとってみても著者独自の視點がみられる。最後に全體をもう一度振り返ってみよう。「(1)錢謙益攻排竟陵、鍾・譚新議」は、錢謙益がどのような意圖で、どのような戦略を用いて、竟陵派を攻撃し、致命傷を與えたかをブルデューの理論を巧妙に援用することによって可視化している。「(2)情欲的詩學——錢謙益、柳如是『東山酬和集』窺探」は中國文學研究史上最もエロティックな論文と言え、ここに嚴氏によって活寫された錢牧齋と柳如是の愛欲生活はその豊かなイメージによって読む者を驚かせる。「(3)哭泣的書——從錢謙益絳雲樓到錢曾述古堂」は錢牧齋死後の柳如是の自殺事件に際し、首謀者の一人として名指しされた錢曾遵王の苦澁に満ちた後半生を豊富な資料を使って再構成した論文である。「(4)清初錢謙益、王士禛「代興」說再議」は、錢牧齋から王漁洋へのいわば「王位繼承」のような神話を信じていた私にとっては衝撃的であった。「(5)錢謙益遺著於清代的出版及「典律化」歷程」は錢謙益死後の遺著の受容を長いスパン

にわたって追ったもので、嚴氏の廣い視野をうかがうことができる。「(6)權力意志・清高宗乾隆帝譴斥錢謙益詩文再議」は(5)を受けて、從來そういうものだと曖昧なイメージでとらえてきた乾隆帝の錢謙益への憎悪が評者の中で明確な像を結んだ晝期的な論文であった。「(7)近代上海『申報』中錢謙益的身影」は近代の雜誌『申報』を定點觀測の場として選り、錢謙益像の變遷を追った好論文で、中國が危機に陥ると彼の負の側面が人々の記憶に蘇ってきて、牧齋が人物の忠不忠、誠實不誠實を判斷する基準となるという現象を論じている。「錢謙益の六道輪廻」(同書三一五頁)とはうますぎる比喩である。「(8)春秋有變例、定哀多微辭——試論錢謙益之論次麗末東國史及詩」は高麗から朝鮮への王朝交替期の史實を『列朝詩集』がどう處理したかという目に觸れにくい問題を詳細に論じた文章で、歴史家としての錢謙益の資質を知る上で貴重な情報を數多く與えてくれた。「(9)典午陽秋、休聽暇豫——朝鮮文士南九萬所述錢謙益詩考論」は錢謙益の數多くの典故を驅使した「反詩」(水滸傳の宋江の反詩ほど分かり易いといいいのだが…)を丁

寧に解釋した論文で、手に汗握る展開になっている。

この書と著者の嚴志雄教授が拙稿をきっかけに日本でも多くの人に知られるようになり、明清時代の文學の研究が益々盛んになればと心から願っている。

(Oxford University Press [China]、二〇一八年四月、四六〇

頁)

註

- ① 以下の番號は評者が假につけたものである。
- ② ちなみに、嚴氏は言っておられないが、「詩酒 已に驅使の分無く」は杜甫の「江畔獨步尋花七絕句」詩の「詩酒尙堪驅使在」に由來するもので、直前の同書五七頁に引用された程嘉燧の詩にある「殷勤料理白頭人」、「顛狂眞被尋花惱」、「被花惱徹只顛狂」などもすべて「江畔獨步尋花七絕句」詩の典故を用いている。なおこのことはすでに陳寅恪によって指摘されている。
- ③ 「世說新語」任誕篇に、「畢茂世云う、一手もて蟹螯を持ち、一手もて酒杯を持ち、酒池の中にて拍浮すれば、便ち一生を了するに足らんと」とあり、泳ぐこと、ひいては太腿を指す。
- ④ 徐丹丹「王士禛評選徐禎卿詩考論」、「文學遺產」二〇一五年第4期、頁一四六一—一五六
- ⑤ 『牧齋初論集』一七二頁
- ⑥ 中央公論美術出版二〇〇三年刊行
- ⑦ 『東國史略』による。
- ⑧ 後漢の光武帝劉秀、文叔はその字である。
- ⑨ 評者が言わずもがなの意見を述べると、「某は斯に在り」は「論語」衛靈公篇の次の話に基づく。「師冕見ゆ。階に及べり。子曰く、「階なり」と。席に及べり、子曰く、「席なり」と。皆坐す。子これに告げて曰く、「某は斯に在り、某は斯に在り」と。…」この「某は斯に在り」は弟子を一人一人名指しているのであるが、牧齋は歴史の證人 (a historical witness) である私がかこにいる、と言ひ換えている。またこの章段の孔子は樂師の師冕に對して極めて謙虚に振舞っており、孔子の謙虚さもこの詩の頷聯に響いている。
- ⑩ 揚雄が「方言」を書くために27年間かけて諸國から來た官吏・軍人の言語を「油素」(光澤のある絹) にメモし續けてきたという「答劉歆書」の典故を用いる。
- ⑪ 錢遵王は「典午陽秋」をわざと「晉春秋」と曲解しており、尾聯の解釋は難しくなっている。
- ⑫ 嚴氏は唐太宗の「孝經序」に、「これを琬琰に寫き、庶わくば將來に補うことあらん」とあるのを踏まえるとしている。
- ⑬ 『牧齋初論集』四〇九頁。

書
評

⑭
疎
遠
な
様
子。